

真宗大谷派名古屋別院 参道整備

The Approach to Shinshu Otani-ha Nagoya Branch

石黒鏘二、品川誠、岡田憲久

Shoji Ishiguro · Makoto Shinagawa · Norihisa Okada

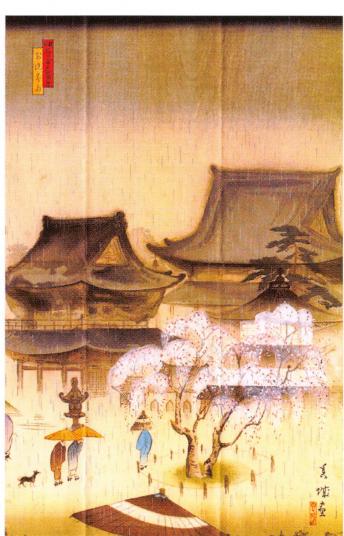


〈概要〉

2003年12月、真宗大谷派名古屋別院（通称・東別院）の参道整備が完成した。

東別院は1690年（元禄3年）、一如上人（東本願寺第16代）によって開かれた真宗大谷派の寺院である。織田信長の父信秀の居城「古渡城」跡地の寄進を受け開かれた。尾張の人々には古くから「御坊さん」として親しまれ、参詣者でいつも賑わいを見せていた。

参道整備計画にあたり東別院から参道のデザイン監修ならびにモニュメント制作の依頼が、名古屋造形芸術大学学長石黒鏘二にあった。これを受けて名古屋造形芸術大学は石黒鏘二、品川誠（教授・建築）、岡田憲久（教授・ランドスケープ）の3名を設計監修チームとし、日建設計、東別院参道整備検討委員会、名古屋市との打ち合わせを行い、参道の詳細デザイン決定と現場監理、そしてモニュメントの制作を行った。



写真上：山門を臨む。以前の参道に使用されていた古材を利用した石畳の中心に石彫りの蓮華紋レリーフを象徴として埋め込み、ツバキとボダイジュをそれぞれ左右に配した。既存のクスノキの大木も可能な限り残した。

写真左：「新版名古屋名所図会 別院春雨」朝見香城画（1931）より。枝垂桜が境内に見える。

参道の範囲は名古屋テレビ東南角の東別院の交差点より西に約250m、東別院山門の南までである。名古屋テレビ、東別院、そして名古屋市という異なる三者の用地を一つのデザインとして統一させるために、計画・施工期間を含めて1年以上にわたり幾度もの打ち合わせが重ねられた。

整備前は5m幅であった名古屋市の歩道を13mに拡幅。三者の敷地境界を感じさせないこと、また既存の樹木をできるだけ残し、緑と花に包まれた参道が無機質に乾燥した都市に潤いを与えるようなデザインを目指した。

また、緑の木陰を山門へ進むと、釈迦の物語がレリーフに描かれ、モニュメントとして立ち並ぶ。「誕生」、「降魔成道」、「初転法輪」、「涅槃」、「仏教伝来」。東別院参道の標識石はインド玉石を加工したものであり、山門前の石の蓮華紋レリーフは中国で加工された。

歴史を現代に伝えるためのデザインの変換が参道全体、さらにはモニュメントにおいて行われた。日常の空間にわかりやすく、緑と花のやさしさをまとめてそれは行われた。環境アートと環境デザインのコラボレーションである。本学の基盤と非常に強い繋がりの場であり、名古屋市の都市環境整備の中でも重要なポイントともな

りうる場で、本学の専門の力が大きな役割を果たしたことは大変喜ばしいといえるであろう。

ハクモクレン、ヤマザクラ、ソメイヨシノ、ベニシダレザクラ、シロヤマブキ、シロサザンカ、フヨウ、スイフヨウ、ハクウンボク、ボダイジュ、ヤブツバキ。木々や草花が生き生きと育ち、道行く人々にその花の香を届けるであろう。

〈整備概要〉

工事名：真宗大谷派名古屋別院参道整備工事

発注者：真宗大谷派名古屋別院（東別院）

整備場所：名古屋市中区橘二丁目地内

計画：名古屋別院参道整備検討委員会

監修：名古屋造形芸術大学

設計・監理：株式会社日建設計

計画及び設計・監修期間：2003年2月～2003年8月

施工：日本道路株式会社

工事期間：2003年9月～2003年11月

主要施設：仏伝レリーフモニュメント、標識石、透水性インターロッキング舗装、石張り舗装、コンクリート平板舗装、植栽枠、石積擁壁、蓮華紋レリーフ、車止め、植栽、照明



東別院参道標識石。インド玉石を使用した。参道の起点である東別院交差点歩道に設置。



以前のレベルに合わせて植栽枠を立ち上げることで既存のサクラを残し、新たな参道景観の要とした。



参道を東別院交差点方向に見る。舗装はこの参道のためにデザインした透水性インターロッキングブロック。



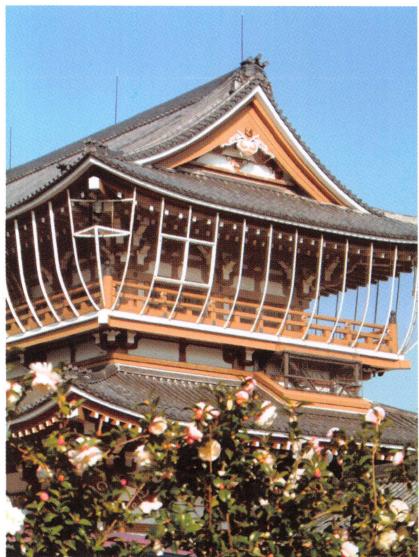
中門前。舗装は手前が古材石敷き、後方がサビミカゲ石による四半敷き。

〈花と緑の参道〉



ハクモクレン、ユキヤナギの花が初春の参道を彩る。ハクモクレンは釈迦の高弟の一人、目蓮にちなんでいる。

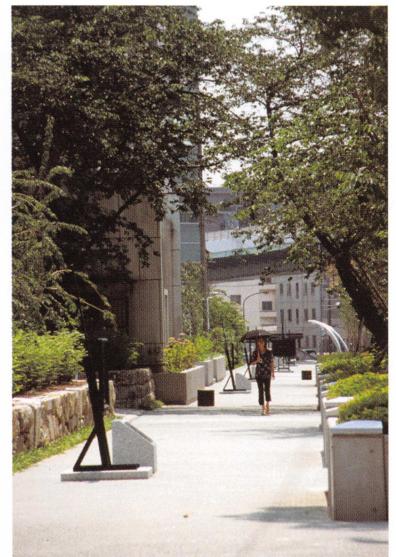
(撮影 稲垣智仁 ※印以下同)



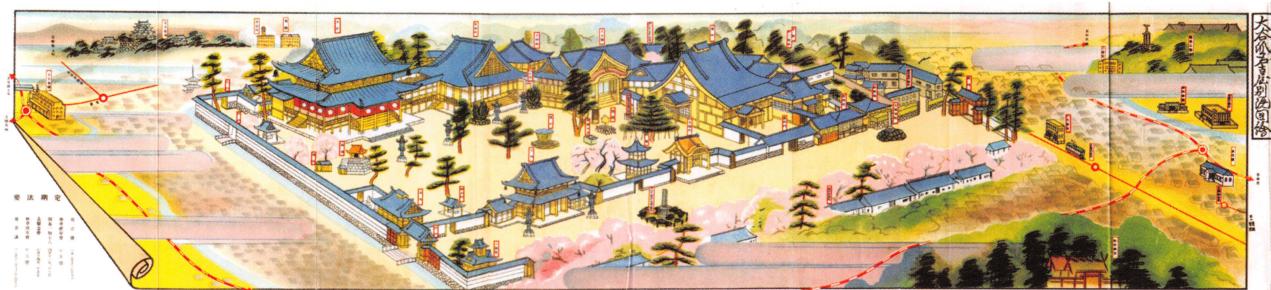
駐車場の生垣は白・一重に薄い紅が入る
サザンカ「曙」。



山門前にはアジサイを群植。頭上に
茂るのはシナボダイジュの葉。(※)



緑が色濃くなる夏の参道。(※)



「真宗大谷派名古屋別院案内」(真宗大谷派名古屋別院発行・1936年)より。戦災で消失する以前の境内や周辺の様子が伺える。
桜並木の参道であったこともわかる。

〈ディテール〉



上：山門前の石彫り蓮華紋は直径 2m40cm（外周を入れると 4m50cm）。淨土に咲くといわれる仏教の象徴的な花を山門前に埋め込んだ。

右上：石垣は以前の石垣の石と土中に埋められていた石を使用し、空積みをしている。

右下：山門前の通路左右にはスロープが設けられている。手前は古材の石敷き、後方はスクラッチ仕上げのミカゲ石敷き。



(※)



(※)

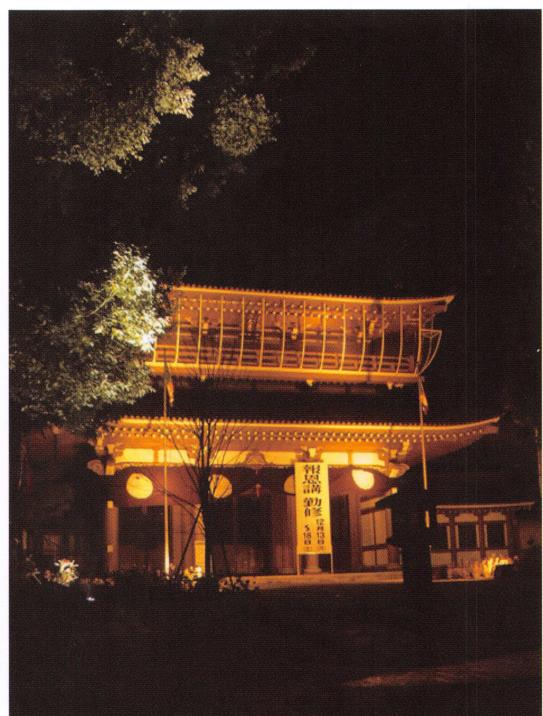
〈照 明 計 画〉

第一期工事：2002年11月30日竣工

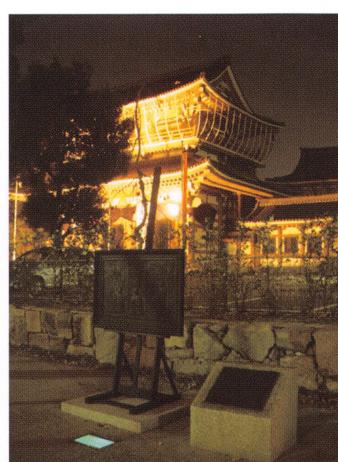
照明関連の第一期工事では、従来、幅員も狭く、夜は薄暗かった別院周辺街路の起点から山門までの新参道を安全に導くために必要な路面照明を設置した。「カクテル・キューブ」((C) 関ヶ原イーテック株式会社・ソーラーセル・バッテリー・LEDにより自動点灯・消灯・点滅) 15基を参道軸線上の路面に埋設。)

第二期工事：2003年8月～11月

参道が整備されると、道行くさまざまな利用者への対応が必要となってきた。照明関連では第一期工事に引き続き、「カクテル・キューブ」を増設し、滑走路に見られるような参道動線の誘導照明を完成した。別院会館・駐車場進入口では階段・横断路を明るくし、さらに、年末恒例の報恩講に合わせて、山門と周辺の樹木をライトアップした。「カクテル・キューブ」52基、「大型投光器」2基、「小型投光器」10基を増設。施工：関ヶ原イーテック株式会社、(株)日展)



参道起点の銘碑から伸びる路上の誘導照明。



仏伝モニュメントとライトアップされた山門。

ライトアップされた山門と緑に輝くクスノキ。

〈モニュメントとその解説〉

モニュメントとその解説プレートはセットとなって、参道上に6基並ぶ。釈迦の誕生から日本に仏教が伝わるまでの物語がレリーフと解説文により描かれており、参道を通る人々に、より仏教への理解を深めてもらおうという意図がある。(ブロンズ、台石：白ミカゲ石。制作：石黒鏘二。文責：北條正徳)

釈尊の生涯 Life of Gautama-Buddha 誕生・Birth of Siddhartha (第1基)



仏教は釈尊の教えであると同時に、私たちがブッダ（仏）となる教えです。釈尊とは釈迦族の聖者のことであり、ブッダとは真理に目覚めた人を意味します。釈尊は今から約2500年前、インド北部のヒマラヤ山脈のふもとの釈迦国(現ネパール)の王子として生まれ、ゴータマ・シッダールタと名づけられました。

釈尊は生まれるとすぐに七歩あゆみ、天と地を指さして「天上天下唯我独尊」と宣言されたといわれます。これは自分だけが尊いという意味ではなく、「われまさに世において無上尊となるべし」(仏説無量寿經)とあるように、誰にも代わってもらえない、尊い者として自己を完成しよう、という決意の言葉です。

誕生の時、甘露の雨が降ったという伝説から、4月8日の花まつりには、誕生仏に甘茶をかけ蓮華の花を飾り、お祝いします。

釈尊の生涯 Life of Gautama-Buddha 降魔成道 Assault of Mara and Sambodhi (第2基)



ゴータマ・シッダールタは、王子として裕福な生活をしていましたが、生・老・病・死という人間の根源的な苦悩を解決するため、29歳の時出家し、求道の旅に出ました。

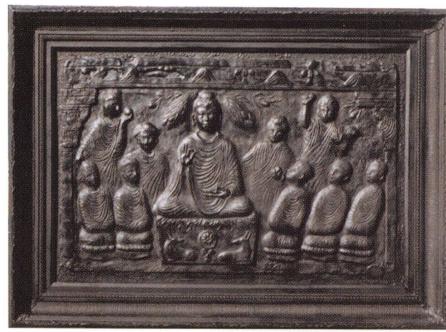
厳しい六年間の苦行の末、これは悟りへの道ではないと知り、ネーランジヤー河で身を洗い、村娘のスジャータから乳がゆの供養を受けて体力を回復します。そして菩提樹の下に座し、真理を悟るまではこの座を立たないとかたく誓い、深い瞑想に入りました。

心の奥底にひそむ煩惱が、悪魔の娘となり悩ましい姿で誘惑し、悪魔の軍勢となり武器を持って釈尊に襲いかかりますが、ことごとく撃退します。

そしてついに人間を苦悩から解放する、縁起の理法を悟り、ブッダとなり釈尊が誕生しました。

時に35歳の12月8日、満月の明け方でした。

釈尊の生涯 Life of Gautama-Buddha 初転法輪 First Sermon (第3基)



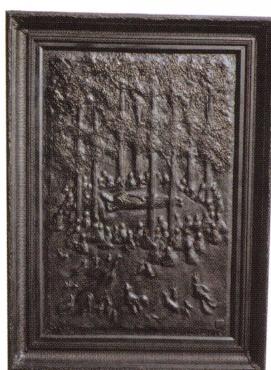
菩提樹の下で悟りを開いた釈尊は、これをくり返し吟味した末、この法はあまりに深く微妙であり、欲望にまみれた人間にはとても理解できないであろうと、人々に説くことをためらいました。

この時梵天が現われ、その優れた教えを説いてほしいと再三お願いしたところ、釈尊は自分だけが正覚を得たとしても、人々が救われなければ本当の正覚とはいえないと考え、説法を決意します。

まずサールナートの鹿野苑にいた五人の仲間に法を説かれます。初めて法の輪が転じられたので初転法輪といわれ、その教えは人間の苦悩を解決する四つの真理（四聖諦）とその実践道（八正道）であったといわれます。

この五人の帰依により、初めて仏教のサンガ（教団）が成立し、以後四十数年にわたり、釈尊は各地で教えを説かれました。

釈尊の生涯 Life of Gautama-Buddha 涅槃 Nirvana (第4基)



80歳になった釈尊は、ガンジス河を渡り故郷へ向かう旅の途中、病気になりました。いつもそばに仕えていた弟子のアーナンダは、死を予感しうろたえ悲しみます。その時釈尊は「自らを灯（依り所）として、他人を依り所とせず。法を灯（依り所）として、他のものを依り所としてはならない」と説かれます。

そしてクシナガラのサーラ樹のもとで、身を横たえて静かに生涯を終えられ、涅槃に入られました。涅槃とは煩惱の炎が吹き消され静寂になった状態、入滅を意味します。

最後の言葉は「すべてのものはうつろい変わっていく。怠ることなく努めはげみなさい」であった。

釈尊の涅槃の日は、2月15日とされています。

仏教伝来 The Way of Buddhism (第5基)



釈尊入滅後、教えは経・律・論の三蔵としてまとめられ、やがて仏教は全アジアに広がり国や民族を越えて、人々の魂の救いとなりました。教団は上座部と大衆部に分かれ、上座部はスリランカ・東南アジアへ伝わり、大衆部は大乗佛教となりシルクロードを通り中国へ伝わります。

大乗佛教は、自ら仏をめざすと同時にあらゆる人々と共に救われていく慈悲の心・菩薩の精神を基本にして、自覚と救済の運動へ発展しました。

インド India

龍樹菩薩（ナーガールジュナ 南インドの僧 2~3世紀）

般若（空）の思想を確立し、大乗菩薩道を説く。八宗の祖師といわれる。

天親菩薩（ヴァスヴァンドゥ 北インドの僧 4~5世紀）

唯識の思想を確立し、願生浄土の道を説く。

中国 China

曇鸞大師（南北朝時代の僧 476~542）

中国浄土教の基礎を確立し、回向の仏道を説く。著作は『淨土論註』他
道綽禪師（隋・唐時代の僧 562~645）

中国浄土教を独立させ、浄土門を説く。著作は『安樂集』他

善導大師（唐時代の僧 613~681）

中国浄土教を大成させ、凡夫往生の道を説く。著作は『觀無量寿經疏』他

仏教伝来 The Way of Buddhism (第6基)



東アジアに広まった仏教は、6世紀ころ朝鮮半島をへて飛鳥時代の日本へ伝わり、日本人の精神・文化に大きな影響を与えてきました。

インドから中国・日本への仏教伝来は、七高僧（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然）および聖徳太子による本願の仏道として、親鸞聖人によって明らかにされました。これは人類普遍の救いの歴史であり、人間性回復を求める人々の深い願いに応える仏道です。

日本 Japan

聖徳太子（飛鳥時代の政治家 574~622）

推古天皇の摂政をつとめ、仏教に深く帰依し仏教による政治をめざす。

親鸞聖人は「和國の教主」と尊敬された。著作は『十七条憲法』他

源信僧都（平安時代の僧 942~1017）

比叡山で日本浄土教を確立し念仏往生を説く。著作は『往生要集』他
法然上人（鎌倉時代の僧 1133~1212）

善導大師の専修念佛の教えに帰依し、浄土宗を独立。

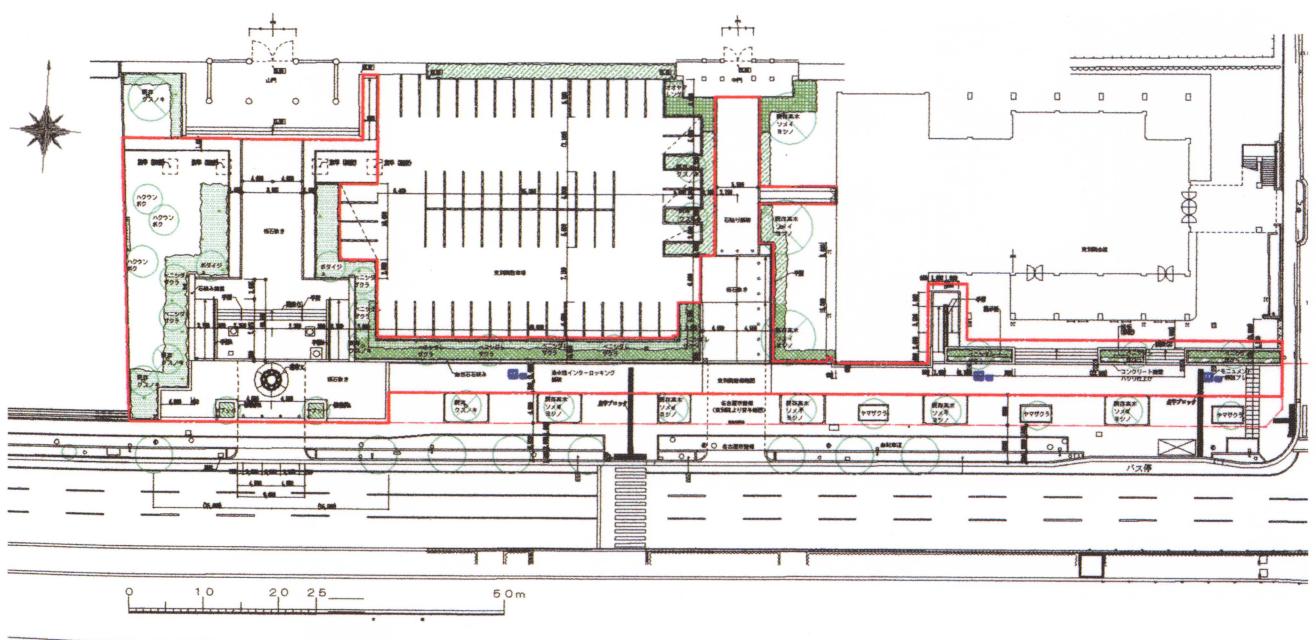
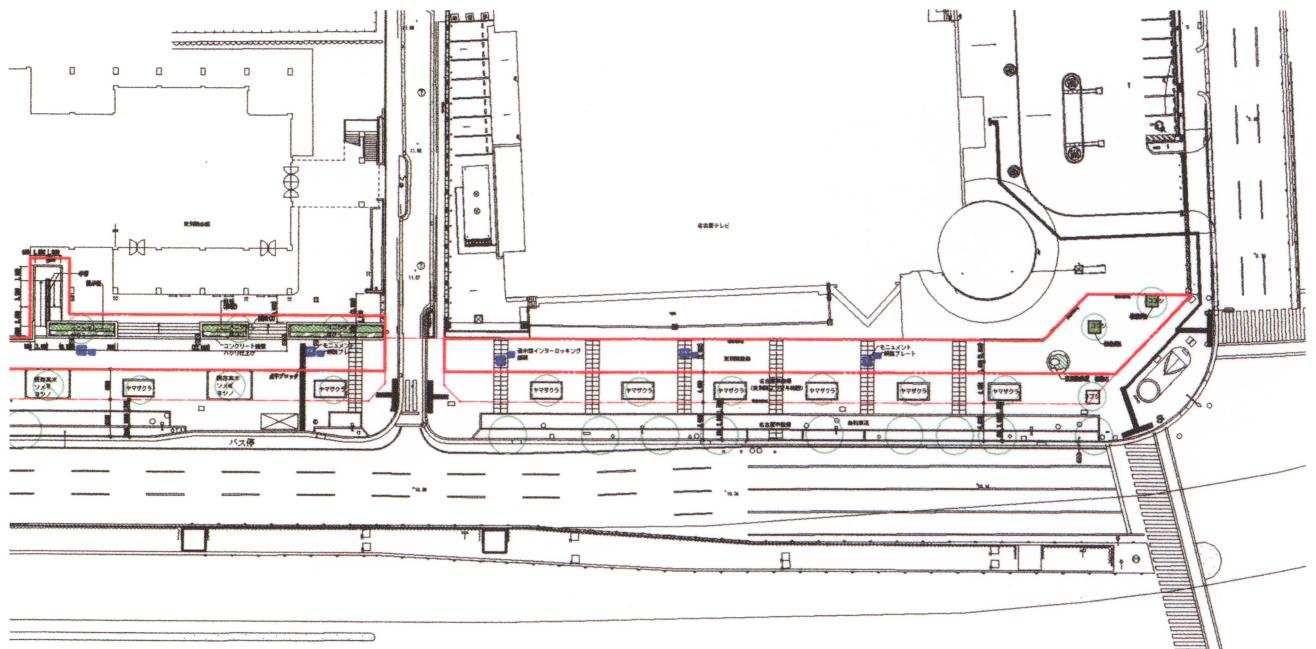
親鸞聖人（1173~1262）の恩師。著作は『選択本願念佛集』他



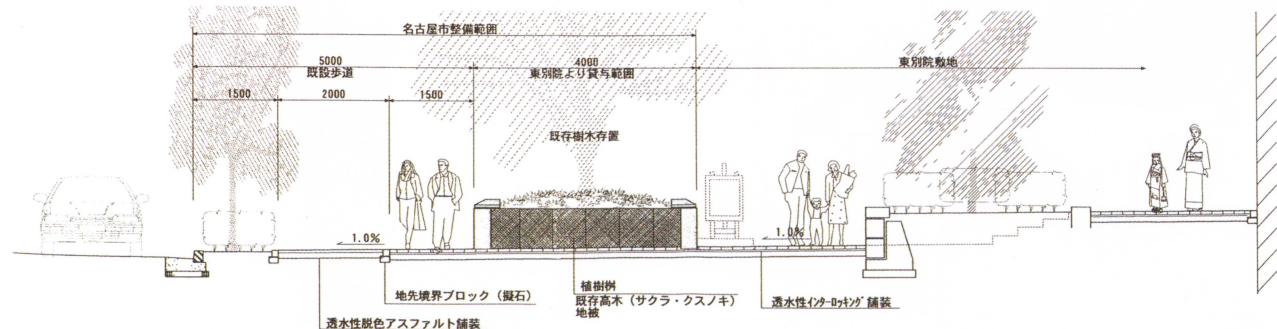
仏伝を描いたモニュメントと解説プレート。これらが6セット参道に並ぶ。(※)



通行人が解説を読みながら参道を歩く。(※)



参道整備平面図 S=1/1000



参道整備立面図 non scale (作図: 日建設計)